

① 判例(のようなもの)

・フォントは基本10・5としましたが、必要に応じて変えたところもあります。

・漢字については旧字体を新字体に改めたほか、左に列挙した言葉は漢字表記を平仮名にしています(数字は該当箇所のページ数)。

之  これ(2・3・10)	斯う  こう(6)
又は  または(2・13)	亦  また(9)
迄  まで(2)	以つて  もつて(9)
即ち  すなわち(3・11)	在つて  あつて(10)
於て  おいて(3・6・8・9・11・13)	稍  やや(10)
其(の)  その(3・9)	殆(ん)  ほとんど(10・11・14)
却つて  かえつて(3・8)	互る  わたる(11)
何う  どう(4・13)	更に  さらに(11)
尚(ほ)  なお(4・6・9・10・14)	偶々  たまたま(11)
略  ほぼ(4・10)	依り  より(12)
然し  しかし(5・13)	爲さず  なさず(12)
及(び)  および(5・7・10・11・12)	凡て  すべて(13)

・旧仮名遣いを現代仮名遣いに直したほか、文字の繰り返しを表す「ト」や5ページの「く」、14ページの「々々」も文字を出しています。その他、必要に応じて濁点を加えた平仮名もあります。

・「※」がついている括弧はその漢字の読みで、私が挿入しました。

・2ページ目と8ページ目にある赤色の四角(□)は、文字がかすれて見えなかったところです。

・補足説明が必要とされるところはコメント機能を使って説明しています。

・2ページ目から8ページにある太い黒線の右側までが原資料の上部、黒線の左側から最後までが原資料の下部になります。

②

震災後の一年間

コメントの追加 [粟倉1]: 原資料ではかすれて見えないが、文脈から「の」と判断。

コメントの追加 [粟倉2]: この二文字のうち一文字目はかすれてまったく見えないので「□」としたが、二文字目は続く明石町の表記から番地の漢数字が入ると判断し、「十」とした。

震災の甚しかった東  
京深川方面の復活  
状態を空中よ  
り写した  
もの  
此の面挿  
入の復興写  
入は全部去る  
八月末に本社の  
特派員が出張撮影  
せるものに係る

新らしく生きんとする帝都

一瞬の間に百億の富を焼き十万の生霊を奪った、大正十二年九月一日午前十一時五十八分四十五秒の大地震―それから恰度(※ちようど)一年になる。地球はグルリと一公転して荒された関東の天地もあらたまった。灰燼は整理され焼跡にはバラックが稠密(※ちゆうみつ)し賑かな銀座の街頭は美しい人のゆききで満されている。過去一年間に集積された人間の力は、とにも角にも焦土の帝都に新生命を吹きこんだ。

大変だった灰燼の整理

総坪数二十万坪、焼失区域の灰燼整理の方法として整理班を三つに分ち第一班は日本橋、京橋、本所、深川方面、第二班は下谷、赤坂、浅草、本郷、小石川、神田、第三班は麹町、芝、赤坂方面。去年の九月二十七日より十一月十五日までは市の直営で運搬に従事した。灰燼は焼跡附近の適当な河岸や路傍に搬出し更に船舶、馬車自動車、手車等で京橋附近は本湊町□十一番地先より同区明石町二十三番地に到る河川または低地の埋立に使いその他は本所深川へ船で運んだ。十一月十五日以後はこれを請負の手に渡したが其整理費五百万円使用人員延数二十万人本所深川方面へ搬出された灰燼は約十萬坪全部の整理に今年の六月までかかった。

どれだけ焼跡へ帰ったか

郊外の安全地帯東北、関西方面に落ち延びた罹災者も日の経るに従って復帰して、今年の六月末日までに復帰した罹災者数は警視庁七月一日現在の調査によると

区名	戸数	人員	区名	戸数	人員	区名	戸数	人員
麹町	三〇〇七	一五五九九	神田	一八二七六	九二〇〇	麻布	七	四〇

コメントの追加【粟倉3】: 原資料では2行前と違って、「卅」ではなく「三十」で表記されている。

③

赤坂	八八八	四三五九	四谷	三〇一	一二六七	日本橋	一四九二九	八一〇二四
京橋	一七七九二	八四四三八	芝	一〇〇〇二	四八四五二	牛込	一	一
小石川	五三〇	二四三三	本郷	四二五九	一五三二四	下谷	一九一八五	八七四八七
浅草	三九三九五	一七五〇二	本所	三五〇八七	一四三〇七四	深川	二五八七〇	一一七三九七
計	一八九四一八	八六七五九三						

すなわち十八万九千四百十八戸、八十六万七千五百九十三人の復帰者を見た。

地震前より減った世帯と人

震災前の大正十二年七月一日東京市の総世帯数は四十四万一千八百七十二、人口二百三万六千三百三十六、これに対して現在の総世帯数は三十七万六千四百十三、人口百七十四万五千五百、すなわち震災前に比し現在世帯数において六万五千四百五十九人口に於て二十九万四千六百三十六人減少している、その細別は次の通り。

	震災前(十二年六月末現在)			震災後(十三年六月末現在)				
	世帯数	男	女	計	世帯数	男	女	計
麹町	一〇三九三	二八四七五	二六五〇七	五四九八二	九八五〇	二四九七四	二三五一九	四八四九三
神田	二六八〇	八〇〇九八	五九四三九	一三九五三七	二〇八〇三	五九三〇九	四三五一一	一〇二八六〇
日本橋	二〇〇八七	六六七六二	四九〇五四	一一五八一六	一五七二六	五二五四	三三五六六	八五〇七〇
京橋	二七五四六	七二二七七	六〇〇八六	一三二二三三	一九八六六	五三〇三五	四〇七九八	九三八三三
芝	三四六六六	八八三三三	七八七〇三	一六六九五五	三三三〇五	八五三三〇	七三七一一	一五八八四一
麻布	一八三三四	四一九三七	四〇五二三	八二四五〇	一八三二九	四三三七三	四一三三三	八四九〇五
赤坂	一一二五一	二六五六八	二七八三五	五四四〇三	一一四二七	二八〇七九	二七八五三	五五九三二
四谷	一五二九六	三四三五七	三三三五〇	六七六〇七	一六三二五	三八〇二二	三六五〇五	七四五二七
牛込	二五二六三	五九六〇二	五七二四八	一一六八六〇	二六三四四	六四八九四	六〇九五五	一二五八四九
小石川	三〇九三五	七三二二〇	六八一九七	一四一三二七	三一九七七	七七七三七	七二二一八	一四九三三五
本郷	二六二五三	六三五四一	五九七九九	一一三三四〇	二五八五五	六六四四四	六〇九九九	一二七四三三
下谷	四〇八〇五	九一九二七	八三四二七	一七四三四四	三六四三三	八三二一八	七三〇四〇	一五六三三八
浅草	五六九〇二	一二五二〇七	二六六三八	二四一八四五	四五三六九	一〇四八九八	九一九七一	一九七八六九
本所	五四九八七	一三二四二四	一二八五七	二四四二八一	三七三五五	八八五二二	七〇九四九	一五九四六〇
深川	四三五四四	九四九七九	八六二一五	一八一〇九四	二七五六〇	六五三七七	五五三三二	一二〇七〇一
水上	一	一六	一六	三二	九	一八	一九	三七
合計	四四一八七二	一〇七七七五二	九五八六八四	二〇三六一三六	三七六四二	九三三四三三	八〇七二一七	一七四二五〇〇

芝の三田、高輪方面、麻布の六本木、赤坂の青山、牛込の神楽坂、早稲田方面、小石川の富坂、大塚、本郷の駒込、下谷の谷中に、四谷方面は震災後かえって世帯数、人口共に増加している、これはいうまでもなく罹災者の集合生活によるもので従つてこれまで大した町でもなかったところが急に賑い出したりしている。現に渋谷の百軒阪の如き第二の銀座を現出しつつあり、日比谷公園内も今にバラック街の電燈煌々、東正門入口から内幸町まで浅草の中店の如き賑わしを見せられている。しかしこれは近く追い追われることになっている。

#### 交通通信機関はどうなった

地震と共に帝都の交通機関は明治初年の昔に返って荷馬車に筵の幌かけが乗合自動車に代る、正に百鬼晝行のありさまだったが一年後の今日ではキレイに復旧した。中には震災前より遙かに増加したものもある。

**自動車** の如きは震災前四千五百台、内五百六十六台を焼いたが、復興材料の運搬その他に激増して三月末日までの関税免除期までは一箇月約五百台ずつの増加を見、四月以後は幾分減少したがそれでも約百台ずつの増加、現在市中の総数は九千七百九十七台、その内自家用が乗用貨物を合して七千三百八十四台、営業用が一千四百十五台、官公署用九百九十八台だ。

**電車** 郊外は全部震災前と同じになり、市内は車輛数に於てポギー車、単車を合してなお二百六十台減少しているがポギー車の補充が以前より約五十台増しているから輸送能力は以前とほぼ同様になっている。六月までの電車復旧の状態を表にすると

	震災前	昨年九月末	本年一月末	五月末	六月末
運転 哩数	一八二九六	五二六九六	一二六九二九	一六四九五九	一六六四七九
車輛	輛				
ポギー車	一三三	六四三	八一七	一一九	一一八〇
単車	七七三	五〇三	三七五	四四五	四六五

**乗合自動車** 震災後東京の郡部は大発展を来し郊外移住者が増えたのでこれ等郊外移住者を当て込んで隣接町村の乗合自動車営業の出願者多く現在では経営者四十、五十系統の乗合自動車会社があつて台数は市の所謂**円太郎四**百台を始めとして東京市外乗合自動車の二百台その他は十台乃至（※ないし）二十台を有するほんの小規模のものではあるが、八月中に市の**円太郎**だけでも延人員百十二万二千五百人の乗客を運んでいる。

**諸車** 人力車はウンと焼けたのと、激増した自動車に押されて段々影がうすくなり現在市内は郡部を合して一万七百八輛、自転車は激増し警視庁管内で総数三万台を突破した。荷馬車は他府県から入り込んできた数も相当あり正確な調査は出来ていない。

**水上交通** 震災前までは芝浦に出入する船舶数が一日十艘内外であったが、直後は例の救済品復興材料の輸送で横浜港が崩れ陸線が不能であった関係上新開港場の如き壯觀を呈し千噸級以上の船艦が五六十隻も投錨した、今では復興材料も既に整い陸線の復旧と相俟つて（※まつて）二三十隻の小型の商船を見るのみである。河川の交通機関としての舢舨（※はしげぶね）も随分焼失したがその後全国から寄り集

コメントの追加 [粟倉5]: 複数人の乗客を乗せて走行する大型の車両のこと。一定の運賃で運行している乗合車両がほとんどで、バスやタクシーなどが該当する。

コメントの追加 [粟倉4]: 百鬼夜行のように、昼間でも荷馬車が頻繁に行き来している様子を指しているものと思われる。

コメントの追加 [粟倉6]: 関東大震災後に東京市が導入したバス車両の通称である「円太郎バス」のことと思われる。もともと、明治時代の乗合馬車が「円太郎馬車」と呼ばれていて、そのフォルムに似ていたことから、このバスも円太郎バスと呼ばれたとされている。

⑤  
コメントの追加 [粟倉9]: 文脈からは「いずれ」と読むが、漢字では「孰れ」と書くので、誤植の可能性あり。

コメントの追加 [粟倉8]: マンホールのふたのこと。

コメントの追加 [粟倉7]: 公衆電話の当時の名称。

つてきたこれらの船は、大河筋にさながら船の展覧会を開いたようで、時々大きな奴が永代橋の橋桁などに打つ突けては電車を止めたり、今ではその数に於て震災前と異らぬのみか寧ろ輸送力に於ては増加している。しかし復興材料品の運搬物が増加したからまだまだ不足の状態にある。  
以上の如く交通機関としての能率は既に震災前に近い復興力を示しているが、橋梁の修復完全ならず道路の舗装も壊れたところ多く、水道瓦斯の工事その他で道路としての輸送率が低下しているから交通状態はまだまだ悪い。

電信 線路は全部復旧した、人員も整って割合に緊張している結果か震災前よりはかえって成績は良好であるが良い機械は全部焼いてしまつて此方にはまだ復旧の手が動いていない。

電話 震災前の総加入者数は八万四千、これに対し今年の七月末までに三万七千九百まで復旧、八月に入って更に二千四百ばかり復旧した。自動電話は五百六十個を焼いて残存四百二十四個のうち現在二百八十個まで復旧している。

### 水道や瓦斯や電燈は？

水道 水道鉄管破裂の箇所は当時二〇四箇所、漏水箇所四万一千三百八十七箇所、消火栓の破損百五十二、阻水弁（※そすいえん）の破損六十五、排気弁十一、チエック弁一、量水器十四、水路の決潰間敷府下和田堀村二十間、代々幡（※よはた）町字幡ヶ谷廿間、亀裂箇所二百四十箇所の多きに達していたが、これらは応急修理の結果震災後四日目から深川、月島方面を除く自然流下区域の水道は全部復旧し、十七日には動力送水区域小石川、本郷牛込等の所謂山の手および高台地域にも送水するに至つた。鉄管の取換えの総数は赤坂区、内径千百耗（※ミリメートル）鉄管の供給一箇所、京橋区、内径九百耗鉄管の供給一箇所、其他百五十耗以下鉄管七箇所、給水栓の現在数は既に三十七万二千百とまで漕ぎつけたが、送水復旧完成期は本年十月中旬と見られている

瓦斯 焼失区域に於ける復旧は千住および深川に於ける瓦斯製造所及び瓦斯タンクが就れも無事であつたから輸送管に応急修理を施すと共に九月二十二日災後始めて本郷区の供給を開始し小石川区は二十六日より、麴町区は二十七日より漸次供給範囲を拡張して十月三十日には残焼区域全部に供給した、残りの焼失区域も十三年十月中には全部復旧を見る筈である。

	震災前	九月末	本年一月末	五月末	六月末
使用戸数	一九五〇二二	八二七五	九二〇六	一〇九九〇二	一七四九七七
	立方呎（※フイット）				
供給総量	四六二七六〇〇〇	九〇〇〇〇〇	四七八七三六〇〇〇	四三三三五〇〇〇	四三九六〇八〇〇〇

電燈 市電は本年四月、東電は昨年未全部復旧して震災後の点燈数は次の状態を示している

⑥

	震災前	九月末	一月末	五月末	六月末
市電	五九八四五	四七五二三	五六二〇九	六〇四七九五	六一四八七六
東電	二二九五七八	六八九八	四四三二二四	七一九二四九	一〇四七二一一
個					

**学校もたいていは開いた**

小、中、高等女学校、実業学校、専門学校、大学で罹災したのは二百十校（総数三百七十四校のうち）、震災後廃校となったのが小学校に六、なお休校中のもの小学校に六、専門学校に一枚あるも、その他は私立学校まで全部開校した、八月七日現在の各学校の状態は次の如くである。

学校種別	震災前の校数	罹災全焼	全潰	半焼大破	廃校	休校	市外移転	開校	新設
小学校	二三二	一三九			六	六	一	二一八	
中学校	三〇	一一	一	二			一	二九	二
高等女学校	三六	一二	二				一	三五	三
実業学校	二四	一七						二四	一
師範学校	二							二	
高等師範	二	一						二	
教員養成所	六	三						六	
高等学校	一							一	
専門学校	二九	一四				一	二	二六	二
大学校	一一	六						一一	
盲及聾学校	二							二	二
計	三七四	二〇三	三	四	六	七	五	三五六	一〇

**新東京はこうして成る！**

新東京としての街路、運河、公園、土地区画整理は東京府市、神奈川県、横浜市共同の下に進めることになっているが、特別都市計画委員会では、事業案のうち、街路及び運河は今年の二月二十八日に、土地区域制は東京は三月二十八日に、横浜は同二十七日に、市場と公園計画案は四月二十三日に、小公園五十二個を設けることは六月二十七日に、いづれも可決されて、目下委員会は商業地域、工業地域、住宅地域、防火地域の指定につき協議することになり大体の基礎が定められた。

街路 の現況は東京市内四箇所の復興局出張所において既に市内の幹線道路十一万六千八百八米のうち十一万三千百一十米までの測量を終り、補助道路十三万六千四百九十五米のうち十二万六千九百九十二米までの測量をも終えたが、区画整理と関係ない部分で左の各線は今年度内には拡張工事に着手されるまゝでになっている。

- ▲有楽町二丁目から木挽町三丁目を経て月島二号地に至る線
- ▲上野公園前から駒形町を経て押上に至る線
- ▲永楽町二丁目の濠端から元千代田町に至る線
- ▲桜田門

外から新議事堂前に至る四十間幅の大道路 ▲芝今入町から愛宕町を経て赤羽橋に至る線 ▲大手町一丁目から一つ橋雉子橋を経て飯田橋に至る線 ▲一つ橋内から南神保町を経て伊岐殿阪に至る線 ▲神田橋内から小川町湯島四丁目日本町一丁目を経て同三丁目に至る線 ▲越中島から浜園町へ至る線

橋梁 街路の一部分となる橋の施設も相当進んで、千代田橋、神田橋、法恩寺橋、親父橋、汐見橋、相生橋、今戸橋、船木橋、福島橋、黒亀橋は仮橋が竣成し、江東橋、菊三橋、澤海橋、聖橋は既に基礎工事に着手、隅田川に跨る駒形橋、蔵前橋、相生橋の大鉄橋も近く本工事に着手しうるまでになった。

運河 今年の六月上旬より着手された西堀留川の埋立は既に五分通り出来上り、日本橋川、横十間川は九月中には着手の予定で荒川筋と日本橋浜町河岸の埋立は今実測中である。

公園 現在東京市の公園は大小併して二十九箇所、この面積七十五万坪、人口百人に対して二十坪の割合であるが、今度の計画では、大公園は国で、小公園は市でやることになって、隅田川の両岸に隅田公園（三万一千坪）本所に錦糸公園（一万八千坪）浜町に浜町公園（一万一千坪）の三大公園を新設するが、既に実測は終わった。市でやる小公園は小学校にくっつけて五十二箇所、一公演平均千坪の見当で区画整理の結果位置決定と同時に順次設備される。

土地区画 これも復興地域を六十五地域に分ち、うち十五地域だけを復興局の手で実施するので、これは本年三月二十日区域の告示があり、第六区（神田駿河台）を始めとして、八月十八日までに十五地域の区画整理委員会の委員の選挙を終り五月二十日に始めて第六区の委員会を開いて、区画整理の街路、整理前後の路線価指数地位位置および面積の決定を見、同地域は既に第一の杭打をはじめたので九月二十日に移転命令を発するまでにいったった。

花街 目につくのは洲崎と吉原の復活の早やかかったことで、粗末ではあるが木の香新らしい二階家の新づくりに絃歌のさんざめき嬌まかしい女の声はつきぬ。吉原の入口には以前とおなじ恰好の見かえり柳も植えられた、大門も建った、貸座敷、引手茶屋、娼妓、待合茶屋、芸妓屋の復活状態は次の表に見て分る

	貸座敷	引手茶屋	娼妓
新吉原	三〇四（二八八）	四六（四〇）	二五三六（一七三三）
新宿	五二（五二）	一	四二八（五九四）
洲崎	二〇一（二四一）	二二（六）	二二二六（三九六）
品川	四四（四三）	六（四）	四二〇（四二三）
板橋	一一（一二）	一	一〇一（一一四）
千住	四三（四五）	一	二〇一（三三三）

⑧

田町	一五(二五)	—	九五(九二)
府中	五(五)	—	三三(二八)
調布	五(五)	—	三〇(三〇)
父島	二(二)	—	二(三)
計	六八三(七〇八)	七五(五〇)	六一〇五(四六四四)

(附記) 上部の数字が震災前、括弧内が今日復活の状態である。貸座敷においてかえって震災前よりも増しているが、娼妓の数は著しく減少している、これは離散したものが容易に帰って来ないこと、貸座敷業者の資金難による抱えの減少、一般不景気の関係等にもよるだろう

次に待合茶屋と芸妓の方面を見ると

待合茶屋	震前	二〇五三	現在	二二二四
芸妓屋	震前	三六八一	現在	三三四二
芸妓数	震前	一〇二三二	現在	九六四四

(附記) 市部郡部を合した数で、これも待合茶屋はかえって増加し、芸妓数は減少している。

劇場活動 劇場では帝劇が既に九分通りの本建築竣成して今秋十月一日より華々しく開場する。木挽町の歌舞伎座も本建築許可の指令をうけ、本年三月より工事にかかり瓦葺の鉄筋コンクリート、前部が四階で後部が三階に地下室がつき、正面間口一七八七〇尺、奥行二七七三五尺、来る十一月末までに竣工、来春早々会場の予定。各活動写真館も一階建木造のバラック、後方を少し高

くしただけで並等(※なみとう)と特等席を区別し大抵四五百人乃至七百人を容れる程度に復活し、相当の□りを見せている。その細別は

場芸演		写真動活		場劇	
計	市部	計	市部	計	市部
二五九	九二	二二二	六四	三〇	二二
六七	六〇	五八	四三	八	二〇
六〇	六〇	四五	二一	〇	〇
九	三二	七七	八	二〇	二
九	六五	一三二	二二	二〇	二
八〇	六五	一三二	八	二〇	二
七〇	五四	九〇	二七	二七	二五
一四	一〇	二五	一	二	一
一五〇	七五	一三二	六六	二七	一九



活動写真では震災前大正十二年一月中の入場人員市郡部を通じて百七十六万五千三百七十六人に対し本年一月中の入場人員は二百十六万四千八百七十四人であって三十九万九千四百九十八人を増し、大正十二年五月の入場者百四十四万二千四十七人に対して本年五月中の入場者百八十八万九千三百七十六人と相変らず四十四万九千二百二十九名の増加であるに反し、演劇においては震災前十二年一月中の入場者六十四万一千四百四十五人に対し本年一月は二十一万五千七百九十五人で四十二万五千三百五十人の大激減となり昨年六月に対する本年六月中の入りも十四万一千五十八人の減少を示している。これは勿論大劇場が全滅し復旧が容易でないからである。

#### 全滅の横浜とその復興

東京に較べて横浜の復興はその被害が甚しかっただけに遥かに遅れている。海岸通り県庁跡附近にはまだ当時の惨状をそのままに髣髴（※ほうふつ）とせしむるものが多い。わずかに焼煉瓦や灰燼が整理されたというばかりで焼残りの半ば崩れた廃墟の如き建物には秋の夕日が斜に落ちて、焼跡には雑草が生茂りこの附近一帯はいつ元の通りになるか、と思うが、一度橋を渡って新山下町に至って始めて横浜復興の悦びを見せられる。町の入口に立った復興門のその名に恥じず本牧までもつづいて立ちあがったバラックの一街は震災後に創められた横浜の復興街である。右に廻れば数千の市民を助けた横浜公園だが園内には横浜郵便局、憲兵分隊、裁判所が仮のバラックに事務を執り公園をとり囲んで生れたおでん屋、きんとん屋、すいとんのトタン商人はほとんど退去を命ぜられ横浜のメーン・ストリート伊勢佐木通りも折柄の夕暮れに電燈煌々、ここにも復興の喜びをみる。稲荷山の麓には関西の二府六県の寄附によって建てられたバラック村が開け、その名を関西村と呼び兵庫通り大阪通り奈良通りの道路もあつて、村の中には公設市場から、小学校、病院、図書館と設備万端がととのいこの村の住人一万九千六百十六名、五千二十三世帯は勿論、住民たると否とを問わず、横浜市民の感謝的となつている。今この横浜復興の過程を数字の上から眺めてゆくと

戸数人口            横浜市の人口は震災前大正十一年末の調査によると人口四十四万八千五百四十人、戸数九万三千七百七十五戸震災によって焼失した家屋は五万五千八百二十六戸、倒壊家屋一万八千四百四十九戸で残存家屋はわずかに一万九千八百戸であつた。震災直後の昨年九月十九日現在の人口は三十万九千五百六十人に減じたがその後家屋も漸次新築せられ人口も逐次増加して本年四月末には家屋数七万四千四百四十戸、震災前の八割に相当し、人口もまた三十四万七千六百〇八人、震災前の七割九分にまで戻つた。とはいえ今日なお市内の各所に震災当時そのままの残骸を止めているところも少からず、震災前の人口増加率をもつても四十四万人の震災前の人口に立返るには大正十八年度までもかかるう。

⑩

在住外人 是震前在住者七千四百九十二人、震災直後の十二月には僅に百名を越えなかったが、本年八月末の調査によると千八百八十九人になっている、これを国籍別にすると

コメントの追加 [粟倉11]: 重い荷物を上げおろしたり水平方向に移動したりするための機械。クレーン。

コメントの追加 [粟倉10]: この漢字でのアルメニア表記は現時点では確認できないものの、語感からそのように推定。

	震前	現在		震前	現在
支那	四八五〇	七六四	英国	九二七	一四九
米國	五〇二	一一九	露國	三五八	八
獨逸	二〇〇	五〇	佛蘭西	一四〇	二五
印度	一一一	四	瑞西(※スイス)	九一	二三
葡萄牙	六六	九	和蘭	三八	五
伊太利	三〇	五	丁抹(※デンマーク)	一八	二
亞耳米蘭亞(※アルメニア?)	一五	一	西班牙(※スペイン)	一四	零
瑞典(※スウェーデン)	一三	一三	波蘭(※ポーランド)	一三	零
墨西哥(※メキシコ)	一〇	零	秘露(※ペルー)	九	零
濠洲	九	零	ユーゴスラバ	八	一
諾威(※ノルウェー)	七	三	波斯(※ペルシャ)	七	零
チエツクスロバキヤ	七	零	希臘(※ギリシャ)	六	二
加奈陀	六	三	埃多利	五	零
白耳義	三	零	智利	三	零
亞爾然丁(※アルゼンチン)	二	零	土耳其	一	零
伯剌西爾(※ブラジル)	一	零	其他	二二	二
合計	七四九二	一一八九			

港湾 東防波堤全長約九百間のうち、端のところ六百十四間、北防波堤全

長約千三百三十間中その端二百五十五間は平均八尺沈下したので震災後少し荒れた日には堤内錨地でも風浪をうけ、荷役不可能の日が多かったが、今日では面防波堤とも修理完成し港口の左右にあってほぼ十尺陥没した赤白の両燈も既に六月完成した。繫船の能力は震災前までは繫船岸壁(総延長千百間)に十二隻棧橋(総

延長二百七十二間)に四隻、繫船浮標に二十隻、防波堤内錨地に三十隻を収容し得たが、右のうち二十個の浮標は災害を免れたので震前と同様の繫留を許してを。繫船岸壁はほとんど全部崩壊したが復旧工事進捗して既に第六号岸壁は補修工事が出来上り六月に至り第九、十、十一号岸壁の工事も竣成し目下第三四号岸壁の基礎工事中である、その他の岸壁も漸次工事に着手し大正十四年三月中には全部復旧の予定である。大棧橋は十四年度十月末に竣成の予定。震災前には船の数が三千二隻この噸数二十四万六千噸もあつたが、震災によつて千七百

七十三隻、十四万八千八百四十噸に減じ、現在ではやや回復して約二千五百隻二十万噸に達している。税関構内および港内の鉄道は延長九哩七分中岸壁工事その他の為今なお使用出来ないところが三哩、その他は震前と同様に復活しなお横浜駅と税関構内とを連結する鉄橋および線路の本工事も本年中には完成の予定である起重機は震前電力によつて運転するもの十九台、蒸気力によるもの三台、人力に

コメントの追加 [粟倉12]: 電線を敷設する際の2点間の距離のことで、現在は「巨長」と表記される(読みは同じ)。

⑪ よるもの四台であったが、これらは全部震害をうけて今日では五十噸機が一機あるのみである。

街路 第一着手として市内枢要なる十九路線を拡築改修し尚横浜駅前に四千九百坪、桜木町駅前に四千二百坪の広場を設置することとなってこの費用二千五百三十八万二千四百円、大正十七年度にわたる六箇年継続事業として着手している。

運河 堀割川と中村川および堀河の二運河を択んで(※えらんで)これを改修することとなり在来の屈曲を除き幅員を拡築する計画で、これも大正十七年度にわたる六年間の計画事業としている。

公園 現在市の公園は横浜公園(一九四四八坪)掃部山公園(四二七八坪)の二箇所であるがこれも六年計画でさらに左の四公園を増設する事になっている。

日の出公園	四八〇〇坪	山下公園	二五〇〇〇坪
野毛山公園	二〇〇〇〇坪	神奈川公園	六〇〇〇坪
合計	五五八〇〇坪		

土地整理 市内焼失区域約三百万坪につき実測を行い内約七十五万坪を区画整理地域と定め、これを十四区域に分つてさらに精査を進めているが、一方関係市民に対してはその趣旨を徹底せしむるため商業会議所、市復興会が躍起となって市民に宣伝している。

交通機関 震災当時市の交通機関は東京と同様ほとんどその用をなさず街路はいたるところ崩壊亀裂し橋梁は八十六橋中大江、吉田、辨天橋の三橋を除く他ほとんど墜落焼失し、たまたま残るものは場末に架設せられた小橋で市要部の交通には全く関係なく一時交通は杜絶し河川もまた舟棹(※ふなざお)の便を失ってしまったが去年の九月六日はじめて応急工事に手を初め工兵隊、陸軍技術本部の援助を待て同月二十日にいたり大体枢要地域の交通だけは回復し、一年後の今日では自動車はの通行にはほとんど支障なきまでに至り自動車は震災後著るしく増加した。橋梁も既に昨年末に於て八十六橋中六十八橋までは応急修理がなつた。電車は震災前の市電軌道の互長(※こうちよう)十二哩六分、運転車輛数一日平均百十八輛、乗車人員十三万九千人であったが軌道の全部架空線の全線を損じた、すなわち

震災前	被害	
軌道	十二哩六	全部
架空線	十二、六	全線
車輛	一五二台	焼失七三台、破壊一六
建物	三二四八坪	焼失その他大破損二九三九坪
変電所	一七〇〇K・W	全部

⑫

舎宅 五五戸

焼失一六戸、倒潰三九戸

コメントの追加 [粟倉14]: 表記上このようになっているが、おそらくこれは「2.4」という意味と思われる。

コメントの追加 [粟倉13]: 飲料水を運ぶ船のこと。

十月二日神奈川、馬車道間の開通を見たのを初めに十月二十六日には全線復旧、現在では災害前の車輛数百五十二輛に対し百六十九輛に増加し関係建物の建坪総数三千百四十八坪に対し二千百十五坪に復旧、変電所の千七百キロも二千六百キロワットとなった。

水道 水源地は神奈川県津久井郡青山にあり、供給能力は八十万入、一人当たり平均一日四立方呎（※フィート）、当時水源地の本管その他主要部は大破して市内の給水断絶九月六日長塚良水合資会社、横浜給水合資会社、ジュラル給水合資会社、横浜清泉合資会社と水船提供の協議をなし直ちに給水に着手したか九月十三日にいたり西谷浄水場市内西戸部藤棚に到る八吋（※インチ）配水管の通水により上水道の一部はここに初めて市内に達するを得、十月末には市内残存家屋全部に給水の運びとなり現在では給水家屋三五〇〇〇戸に達している。

電信電話 震災直後には京浜通信機関は全部用をなさず海外電信はいうまでもなく内国電信も九月六日より辛うじて埼玉県川口駅より通信するを得た次第であったがその後の復旧状態は

	震前	現在
内国電信着	一三六六	一〇一六
同 発	一九〇三	一八一九
外国電信着	五三四	一六七
同 発	五六五	二一〇

となり電話は昨年十月中旬にいたり初めて一部通話 現在では

	震前	現在
加入電話数	一〇三八九	三六四〇
通話所	一九	一七
自働電話	三六	四〇
従業員	六八七	四六九

電燈 市内の点燈および動力用電力は全部東京電燈株式会社の供給をうけ送電量は一日平均二三〇〇キロワット、うち動力用として三九〇七馬力（容量）既に震災前と大差はないが電燈に於ては震災前の燈数三十九万七千七百七十二燈に対し現在燈数十九万九千五百五十五燈で各戸平均燈数は震前の五に対し現在は二、四燈、現在家屋の多くはバラック式であるから今後本建築にすすむにつれて燈数は増す。

コメントの追加[粟倉15]: これは「を」が一文字余計である。おそらく誤植であろう。

⑬

瓦斯 震前は瓦斯製造工場は一箇所、その製造能力は百六十四万立方呎であったが震災当時その設備は根本的に破壊されたので容易に復旧しない市内のホンの一部に対する瓦斯の供給をなし得るのは本年末のことと見られている。

活動写真 震災前は十五館、いずれも二階又は三階建、看客七八百名から

千二三百名を容れていたが震災により大部分は被害、現在では十五館復旧、新たに一館を増して十六館となった。

劇場 横浜座、喜楽座、朝日座、横浜劇場の四劇場であったが横浜座を除

く他の劇場は復興し更に横浜帝国館が開業した。寄席は九月以前は十一、災後復興せるもの六、新設二

鎌倉小田原はどうなった

東京から国府津に至る鉄道の各駅は品川、国府津外一二を除いて全部倒潰、全焼大破したが今はすべてその附近に木造バラック建の仮小屋が出来上り雨露を凌いで切符売場に当てている。待合室のない駅もあり、駅の外部なる簀子(※すのこ)張りの待合室では太陽は凌げても雨は凌げそうにもない。しかし当時波のようにうねり曲った線路や恐ろしい亀裂を生じたフォームはすべて修理され馬入用の大鉄橋も今年の八月十四日に美事(※みごと)試運転通過に成功し十五日より下り線は従事の補橋、上り線はこの復興の新鉄橋により複線開通の関の声を挙げた。と同時に途中沿線の被害の激甚を極めた各町村も汽車の窓から見ゆる限りは全部トタン屋根の復興を見せ、中には家の周囲に緑樹を植えた文化住宅まがいのバラックも見える。

鎌倉 鎌倉は鎌倉町小阪村、玉縄村、村岡村、深澤村、川口村、腰越津村を合して普通鎌倉といわれているが

	総戸数	人口
震災前	七三九一	三六八四三
現在	六五八七	三三九三四

即ち震災前に比し戸数において八百四戸人口において二千九百九人を減じている。このうち現在戸数および人口の内訳を示すと

	戸数	人口
残存戸数	三一六二	一六五四七
半壊家屋	二五八	一一〇七
新築家屋	二二三八	一一二〇
バラック	七八四	四二二六
掘立小屋	四七	三七〇

コメントの追加 [粟倉16]: 当時、爵位（公爵・侯爵・伯爵・男爵・子爵）を持っている人物を表記する際は、名前あるいは名字の下にそれぞれの爵位を表す漢字も併記されることがあった。ただし、最後の中村是公（ぜこう）は爵位を持っていない。この中村は関東大震災の翌1924年に東京市長に就任している。

⑭

その他

九八

四七四

海岸方面別荘地帯では毎夏お見えになる伏見宮邦芳殿下の御別邸を始めとして故松方公、島津忠承侯、前田利為侯、浅野惣一郎、西川伯、伊地知男、花山院侯、近衛秀麿公、中村是公の別荘が全部潰れたまままだ復旧しないという有様、従って今年の鎌倉は頗る物寂しく山階宮武彦親王殿下の王妃佐紀子妃殿下御遭難の御別邸も今なおそのままで秋草にすだく虫の音のもれきこゆるのもおいたわしき限りである。鎌倉の大仏は最初の地震に一尺五寸ばかり揺り出し二回目の地震に五寸ばかり揺り戻したが今のところ墓石に応急修理を加えたのみでそのままに残されておる、近く修理にかかる筈。八幡宮の舞殿も取払われて今は七五三のしめ縄がその跡に張り巡らされてある、燈楼の倒れたのもそのまま。全壊した中学校師範学校はバラック建で復旧し郵便局も同様にバラック建ち、警察は半潰のものを引き上げてその中で事務をとっているが毎年見る五六千の避暑客も今年は二千四五百に減じた。

小田原 は現在バラック数が千三百四十、人員五千百九十七人、残存したものはわずかに七百三十四戸、四千百二十八人で新築家屋千七百四十七、人口九千四百四十人、これを足柄下郡全体の上から見ると新築家屋四千四百十二戸（二万三千二百一十一人）バラック三千二百八戸（一万四千六百五十八人）掘立小屋千五百三十一戸（八千二百二十四人）その他九十三戸（六千三百七十四人）で震災前に比較すれば戸数二百五十四戸、人口五千七百九十一人減じているが、小田原町としての復興率は横浜なんかに比して四五割も早くほとんど本建築で復旧している。殊に同町目貫ぎの大通りなる幸町のごときは震災前よりも美しく宮小路の劇場や活動写真館も以前に倍加して賑わしい。ただ道路だけはなお荒れている。御用邸は安政の地震に崩れなかった石垣も今度は滅茶滅茶に崩れてひどく荒れているが昨年そのままの状態におかれて、御用邸の中の一隅にバラックを建てて小田原高女が仮授業を続けている。小田原中学も焼失を免れたが大破したので目下取壊つてバラックで開校、警察は二階がへちゃばって二階が地に着いたので目下二階をそのまま一階にして使っている。郵便局も町役場も仮建築のバラックで区裁判所だけが新しく本建築がほとんど出来上っているがこの地は予想外に復興が速かった。